



中村先生を偲んで

麻布学園OB 谷山雅裕

開成OBでない私が本誌に寄稿させていただく榮に浴し、まずは厚く御礼申し上げます。

出会いと別れ

中村先生と私の出会いは、四十年前私が中一の年の開成祭でした。

当時は、秋の開成祭と春の麻布文化祭で駒場東邦と三校リーグを組んでおり、当時の開成中学のアスファルトのアウトコートで、入部したての私に、「おい、君は皇太子（現天皇）に似ているな」と声を掛けていただいたのが最初の会話でした。

そして、昨年三月国立医療センターにお見舞いに伺ったとき、

「俺はもうだめだ」とベッドから手を振られたのが、先生との最後の会話でした。

恩師

その間、四十年もの永きに亘り開成外の私を隔てなくご指導いただき、麻布にはバレーボール専門の先生がおられなかったこともあり、私にとっても中村先生はまさに恩師でありました。（開成の皆様には申し訳ありません。）自分の母校以外に恩師がいることは、密かに私の誇りでもありました。私にとって中村先生はそういう存在でした。

麻布との関係

開成、麻布の永い友好は、麻布にとってまさに中村先生のお気持ちのこもった尊い遺産だと感謝しております。開成、麻布の間には、各クラブで何らかの関係がありますが、「これだけ永い間深い友情が継続しているのはバレーボールだけだ」というのが中村先生の口癖でした。私もその口癖を誇りをもって引き継いでおります。

先生は、「俺は、麻布に負けるのが一番悔しいんだ。」とよく言ってお

られました。私は、数年前まで親戚のような開成との勝敗にそれ程のこだわりはありませんでした。しかし、最近私も「開成に負けるのが一番悔しい」と思えるようになり、中村先生の言われたことがよくわかるようになりました。これこそ本当の友情関係ということがわかりました。また、麻布が元氣のないときは、わが子のようによく叱咤していただいたことも昨日のこのようです。

審判

中村先生は、審判員としても国際審判員として世界のレベルでご活躍されましたが、私がまだ二十代のころ、先生が高体連の役員の中堅で、大会などでよく先生の審判のお手伝いをさせていただき、勉強させていただいたことがあります。そのときよく審判のこつを

「疑わしきは罰するんだ」とご教授いただいたのが印象的でした。

但し、私も現在B級の端くれで吹いています。これだけはちよっと違うのではと今は思っています。

偉大な指導者として

ここ数年、残念ながらバレーボール人気は低迷の一途ですが、その中でも開成バレー部は驚くほどの多くの部員数を毎年維持し、しかも関東大会五回出場など素晴らしい実績を積み重ねておられることは、まさにスーパーチームと云えます。殊に、開成という特殊性（トップレベルの進学校で、スポーツが強くなりやすい体質）を乗り越えての伝統の力は、奇跡に近いものです。それを作り上げ、成し遂げたのは中村先生です。優秀選手をセレクション入学させている学校が強くなるのは当たり前です。開成、麻布のような選手を選べないチームを強くするの、真の指導者の力だと思っています。

バレーボール人気低迷してからの開成バレー部の底力に、中村先生の指導者としての偉大さを感じ、尊敬の念をつよくしております。



先生の最期に五回目の関東大会出場を果たしたことは、まさに中村開成チームの集大成であったと大いに賞賛したいと思います。

五校リーグ・六校リーグのこと

高校の五校リーグ、中学の六校リーグの運営も中村先生と一緒にやらせていただきました。ワンマンな先生と他校を調整するのに苦労もしましたが、先生がおられなくなつて重しがなくなつたような気がしています。

先生が亡くなつて二度目の五校リーグ、六校リーグを迎えようとしております。おがましいですが、先生の替りをするつもりで私も頑張りたいと思つております。多分、私のやり方も直伝中村流かも知れません。

先生とのエピソードはまだまだ語り尽せないほどありますが、先生との思い出を大切にするためにも、小出しにして永くご披露して行きたいと思ひます。

中村先生のバレーボールに対する強い情熱と遺志は、開成OBの皆さん、そして私にも受け継がれております。

中村先生に感謝しつつ、心からご冥福をお祈りいたします。

合掌